

エゼキエル書38章 「ゴグとマゴグ」

アウトライン

1A 北の果てからの襲撃 1-6

2A 安心しているイスラエル 7-16

1B 終わりの日 7-9

2B 分捕り 10-13

3B 地を覆う雲 14-16

3A 神の怒り 17-23

4A 死体処理 39章

本文

私たちのキャンプは、「マラナサ・バイブル・フェローシップ」と呼ばれるキャンプです。マラナサという言葉は、「主よ、来てください。」という意味です。そして、これは初代教会のクリスチャンたちが、ローマからの激しい迫害を受けていた時に、挨拶になっていた言葉でした。主が戻ってきてくださり、私たちを慰めてくださる。主はこの地上を裁かれるが、私たちを免れさせてくださる。そして、この地上にイスラエルに約束された、神の国を建ててくださると信じていました。

今、私たちは終わりの日に生きています。この世界がどれだけ変わってしまったか、少しニュースを見るだけで、また何十年かこの地上に生きていただけでお感じになっていると思います。聖書というのは、何千年も前に書かれている書物なのに、その後起こる出来事を前もって預言しており、今現在起こっていることにも触れている画期的な書物です。ですから、今、この静かな夜に、永遠に生きておられる神、初めから終わりのことを教えてくださる神が私たちに何を語っておられるかを知りたいと願います。

エゼキエル書 38 章を読みたいと思います。そして 39 章にも少し触れます。エゼキエルという預言者は、紀元前 597 年に第二次バビロン捕囚があった時に、他のユダヤ人といっしょに捕え移された祭司でした。そのバビロンの捕囚の地で、神からの幻を受けました。ですから、今から約 2600 年前に書いたものです。そして、バビロン捕囚が起こった後で主は彼に、イスラエルが回復する幻を与えられました。36 章から 39 章に、回復を少しずつ行なわれる、段階的な回復を語っておられます。

36 章では、「土地の回復」です。神は、イスラエルをひどく憎んで、バビロンによってユダヤ人が捕え移された後の地を我が物にしているエドムに強く反応され、それでイスラエルの山々に木を生えさせ、実を結ばせ、町々を建て、人を増やすと約束されました。37 章は、「国の回復」です。バビ

ロンでの捕囚の民が、まるで自分自身が干からびた骨であるかのように、打ちひしがれて、絶望しているのに反応して、この人々を国として復興することを約束されました。そしてこれから読むところ、38 章そして 39 章は、無事に帰還して国も建てられ、安心して過ごしているところに遠い国々から攻めてくるところ、主が救ってくださる幻になっています。ですから、「安全保障の回復」です。

巷では、ニュースで「安保法制」についての議論が盛んですね。日本の国土が、そしてその中に住む私たち国民が、敵からの攻撃から守られ、安全に暮らすことができるようにするための体制です。このことについて、賛否両論がありとても大きな議論になっていますが、それは国というものの根幹が、安全保障だからです。安心して暮らすことを、私たちは何よりも願っています。これは国のみならず、自分の住んでいる地域についての安全もあります。自分の家については、安全が保障されているでしょうか？泥棒や悪い人だけでなく、詐欺もあれば、また会社からの裏切りもあれば、知人や友人から騙されることもあります。私たちは心の奥底で、「自分を守ろう、救おう」としています。生存本能です。しかしイエス様は、「自分を救おうとするものはそれを失い、わたしと福音のために失う者はそれを救う。」と言われました。イエスこそが、私たちの安全であり、安心、守りです。

イスラエルは、まさに国と民族において、私たちが日頃経験する、安心と安全との戦いを経てきた人々であります。彼らの歴史は、エジプトにおける奴隷状態から始まりました。そこにいる彼らを虐げる王、エジプトのパロから主は彼らを連れ出してくださいました。敵に囲まれていき、ついに約束の地でダビデを王とするイスラエル国ができました。そしてソロモン時代に、平和と繁栄を享受しました。ようやく神の安全が確保されたと思いきや、彼ら自身が神から徐々に離れていき、主から目を背けたので、アッシリヤとバビロンによってその土地から引き抜かれたのです。

そして七十年後にバビロンから帰還することができました。しかしその時は、ペルシヤ帝国の中にいました。彼らの帰還事業、神殿再建の事業は周囲の住民に強い反対を受けました。そしてギリシヤの支配に移りましたが、その時は彼らの信仰がギリシヤの偶像礼拝を強要されるという過酷なものでした。彼らは戦いました。けれども、次にローマが来ました。そしてローマに媚びるヘロデという男が、ユダヤの王としてエルサレムに入ってきました。それで新約時代に入ります。ユダヤ人は、安心して、安全に暮らすということは、そのようなこの世の権力者の支配の中で保証されていませんでした。

そしてユダヤ人はついに 64 年にローマに反乱します。そしてローマは鎮圧すべく戦い、70 年にエルサレムにやって来て、神殿を破壊、そしてユダヤ人は世界に離散する民となったのです。そしてユダヤ人は、その離散した土地で異邦人から嘲りと迫害、酷い時は虐殺もされてきました。その長い歴史の中で、とんでもないことが前世紀に起こったのです。ヨーロッパを中心とする離散の地からユダヤ人たちが帰還してきて、1948 年にイスラエルを建国させたのです。したがって、36 章と 37 章はすでに私たちの近くの歴史で実現したのです。ユダヤ人が集まって、そして国まで造って

いるというのは、千何百年もあり得ない話だったのです。しかし聖書は 3500 年前から預言していたのでした。ですから、イスラエルという国は、私たち人間が心の底から欲している、安全と安心の保証を求めるその心を、国という大きな規模で示している歴史を持っています。

エゼキエルは、36 章、37 章共に、二つのことを描いています。それは、イスラエルが国々から戻ってくる、そしてこの地に安心して住む。そして次に、御霊が降り注がれて、彼らの心が清められ、神こそが彼らの主であることを知る、ということです。ですが、イスラエルはまだ、イエスがまことのメシヤ、キリストであることを知りません。主がこれから示してくださいます。彼らがそれを知ることのできる、大きなきっかけになるのが 38-39 章の出来事です。それだけではまだ知ることができないことは、他の預言書を読めば分かりますが、それでも御霊によって彼らは確実に覚醒します。

徐々にではありますが、イスラエルの人々の中に、またイスラエルを注視する異邦人の中に、たしかに主は生きておられると認める人が出てきています。けれども、この奇跡的な土地の回復をもってしても、また奇跡的な国の復興を見ても、なお主を認められない人々が大勢いるのです。そこで主は、ちょうど出エジプト記で行なわれたのと似たことを行なわれます。出エジプト記において、主はこれでもか、これでもかというばかりにエジプトに災いを下し、エジプトから連れ出されました。しかし、主はパロの心を頑なにし、彼がイスラエルを追うようにされたのです。そして、絶対的危機に持ちこまれます。けれども最後、紅海を分け、そこを通らせることによって、ご自分がヤハウェであることを示され、イスラエルは神とモーセを信じました。同じように、主は、豊かな地、安全になっているところに、絶体絶命の危機を、ゴグを通して与えられ、そしてゴグを打ち碎かれることによって、イスラエルの民、また諸国の民が、この方こそまことの神、まことの主であることを認めるように仕向けられます。

1A 北の果てからの襲撃 1-6

38:1 さらに、私に次のような主のことばがあった。38:2 「人の子よ。メシエクとトバルの大首長であるマゴグの地のゴグに顔を向け、彼に預言して、38:3 言え。神である主はこう仰せられる。メシエクとトバルの大首長であるゴグよ。今、わたしは、あなたに立ち向かう。38:4 わたしはあなたを引き回し、あなたのおごに鉤をかけ、あなたと、あなたの全軍勢を出陣させる。それはみな武装した馬や騎兵、大盾と盾を持ち、みな剣を取る大集団だ。38:5 ペルシヤとクシュとプテも彼らとともにおり、みな盾とかぶとを着けている。38:6 ゴメルと、そのすべての軍隊、北の果てのベテ・トガルマと、そのすべての軍隊、それに多くの国々の民があなたとともにいる。

ここに、イスラエルを取り囲み、それを攻め取ろうとする軍隊の構成が書かれています。首謀者は、「メシエクとトバルの大首長であるマゴグの地のゴグ」です。そして、ゴグと連携して、ペルシヤ、クシュ、プテが出陣し、またゴメル、ベテ・トガルマも参戦します。その他、多くの国民がります。

これらの国々はいったいどこかなのかと皆さん不思議がられるかもしれませんが。二つの特徴が

あります。一つは、主に北の果てにある国々だということです。15 節に「北の果てのあなたの国から」とあります。どこから見て北かといいますと、もちろんイスラエルから見て北です。そして、もう一つの特徴は、聖書に啓示されている「地の果て」と呼ばれるところ、イスラエル周囲の諸国ではなく、もっと先にある国々が主に関わっていることです。ペルシヤは今のイランです。けれどもイランの手前にイラクがあるし、その手前にはヨルダンがあります。けれども、当時のヨルダンであるアモン、モアブ、エドムはここに出てきません。当時のイラクであるバビロンも出てきません。クシュはエチオピアで、今のスーダンとエチオピアの所です。プテはリビアであります。北アフリカですね。けれどもエジプトがいません。もっと、もっと遠いところです。

そしてゴメルとベテ・トガルマは今のトルコにいたであろう人々であり、メシエクとトバル、そしてマゴグは黒海とカスピ海周辺を中心にして生きていました。今のロシアの南部とその下にあるグルジアやウクライナ、また「～スタン」とついている、旧ソ連南部のイスラム諸国です。けれども、北と言えばその手前にはシリアがあり、レバノンがあります。シリアはイスラエルの長年の宿敵ですが、それでもここに出てきません。

なぜならこの預言の特徴は、隣接する周囲の国々が戦争をすることではなく、もっと大きな、世界的な規模で、豊かになって平穩に暮らしているイスラエルに対して、それを貪ろうとする企みを描いているからです。(この国々の多くがすでにエゼキエル書に出てきています。27 章に、世界を相手にして貿易をしているツロの町の交易相手として、ベテ・トガルマ、トバル、メシエクが出てきて、また後で出てくるタルシシュも出てきます。そしてエジプトがバビロンに倒されて、陰府に下った時にそこには既にメシエクとトバルがいました。そしてノアの時代、洪水が起こった後に、世界に民族が分かれ出たことを創世記 10 章が伝えています。ですから、世界的規模でイスラエルを攻めようという動きがここエゼキエル 38 章なのです。)

周辺諸国との戦いは預言されています。代表的なのは詩篇 83 篇です。「彼らは言っています。『さあ、彼らの国を消し去って、イスラエルの名がもはや覚えられないようにしましょう。』彼らは心をつにして悪だくみをし、あなたに逆らって、契約を結んでいます。それは、エドムの天幕の者たちとイシュマエル人、モアブとハガル人、ゲバルとアモン、それにアマレク、ツロの住民といっしょにペリシテもです。アッシリヤもまた、彼らにくみし、彼らはロトの子らの腕となりました。セラ(4-8 節)」アラブが「国を消し去って」という言葉は、アラブ諸国のお決まりの掛け言葉になりました。ユダヤ人を地中海に投げ込んでやる、と威勢をあげていましたし、今もあげています。

今読んだところに出てこない国々もありますが、例えばシリア、昔はアラムでしたが、アラムの首都ダマスコは倒れて、廃墟となるという預言があります。「見よ。ダマスコは取り去られて町でなくなり、廃墟となる。(イザヤ 17:1)」エジプトについては、それが女のように弱くなり、最後はイスラエルの支配下に入り、イスラエルの神、主を受け入れるという預言がイザヤ書 19 章にあります。さらにバビロンはイザヤ書 13,14 章によると攻められて滅びる、そして黙示録 17,18 章によると同じ

ように滅びることが定められています。ですから、周辺諸国への預言はあるのです。けれどもここエゼキエル書では、そうした地域的な紛争ではなく、かなり広範囲の戦いを指していることを知らなければいけません。

ユダヤ人が世界から帰還してイスラエルが建国すると、周辺アラブ諸国がすぐに反応して中東戦争が始まりました。けれどもその戦争の背後で世界が何かを企むかのように蠢いていました。イスラエルが数々の戦争で連勝し、この国が強くなり、豊かになったその時、マゴグの地のゴグが多くの国々と連合してイスラエルを攻めようとする姿を、実は、今の時代に私たちは見ることができるのです。

もう一度、一つ一つの国々を見てみましょう。というか、もっとも大事な「ゴグ」についての説明をしなければいけません。日本語訳で「大首長」となっているところは、英語ではそのまま固有名詞として「ロシュ(あるいはロシ)」となっています。日本語の文語訳ではそのようになっています。読んでみます、「ロシ、メセクおよびトバルの君たるマゴグの地の王ゴグ」です。

確かに「ロシュ」は、イスラエルの新年である「ロシュ・ハシャナ」で分かるように、聖書では「頭(かしら)」という意味で使われています。けれども、古代の文献の中ではロシュを一つの民族また国として扱っており、ヘブル語をギリシヤ語に翻訳した七十人訳には「ロシュ」と訳されています。実は新改訳聖書にもロシュは出てきており、イザヤ書の最後にこう書いてあります。「わたしは彼らの中にしるしをおき、彼らのうちののがれた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、プル、ルデ、メシエク、ロシュ、トバル、ヤワン、遠い島々に。これらはわたしのうわさを聞いたこともなく、わたしの栄光を見たこともない。(66:19)」そしてこのロシュは、黒海とカスピ海の北の辺りの地域であることが古代の文献から分かっています。つまりロシアです。そしてマゴグですが創世記 10 章 2 節には、ヤペテの息子の一人です。主に地中海、そしてヨーロッパに散っていった人々ですが、ヨセフスなど、さまざまな古代資料から「スキタイ人」であることが分かっています。

今、アメリカで白人のことを「コケージアン(Caucasian)」と呼びますが、スキタイ人はインド・ヨーロッパ系の民族でコーカサスを中心に、ロシア南部地方のかなり広い範囲にいた遊牧騎馬民族国家であったと言われています。聖書には、コロサイ 3 章 11 節に「そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。」とパウロが言っていますが、「スクテヤ人」がそれです。パウロは彼らを未開人の隣に置っていますが、かなり獐猛な恐ろしい民族だったようで、征服した民のしゃれこうべを使って、その血を飲んだという記述もあります。ロシアのモスクワ博物館に行けば、スキタイ人の展示があるそうで、ロシア、また今の南にある国々に分布していたことは確かです。興味深いことに、中国の万里の長城はアラビア語で「アル・マゴグの壁」と呼ばれています。マゴグ、スキタイ人からの進入を防ぐ壁だったからです。

この章で出てくる彼らの武器は「馬」「弓」「槍」「剣」ですが、これらはスキタイ人の姿をよく表しています。けれども、今ではかつてスキタイ人がいたところにイスラム教になった旧ソ連の諸国があり、彼らは今でも馬や剣を使っています。彼らが西洋人を剣で首切りの刑に処しますが、それは今でも行なっていることであり、そして効果的です。そしてメシェクとトバルですが、マゴグと並んでヤペテの息子として出ています。地理的には先ほど話したように、トルコの北東、黒海とカスピ海の辺りにいた人々です。

非常に興味深いことに今、私たちはロシアの台頭を見えています。もちろんロシアはソ連邦の時から強い国でしたが、プーチンが首相になってからは「母なるロシア」を復興すべく、独裁的な、拡張主義的な強国にする野心を持っています。2008年8月に、グルジアにロシアが侵攻しましたが、そこはマゴグ及びメシェクとトバルがあったと言われる地域です。

私たちは、イスラエルが独立宣言をしたちょうどその日に、周辺のアラブ諸国が攻め入った第一次中東戦争を知っています。その後、イスラエルとエジプトの間のシナイ作戦、そして、エジプト、ヨルダン、シリアとの間で六日戦争、そして1973年、エジプトとシリアとの間でヨム・キプール戦争がありました。またガリラヤ平和作戦と呼ばれるレバノン内におけるPLOとの戦いもありましたし、第二次レバノン戦争は最近ありましたね。とにかくイスラエルは周辺アラブ諸国とのみ、戦争を交わしています。けれども、その中で着実にロシアの関与が強くなりました。六日戦争の時はソ連もアメリカも、世界大戦になるのを恐れて関与するのを控えましたが、ヨム・キプール戦争の時はシリア側に深く関わり、ロシア製の武器のみならず、ロシア軍の兵士も送ったのではないかとされています。そのため、地中海に浮かぶアメリカの戦艦が警戒態勢に入り、核戦争の危機に陥りました。そして1982年のガリラヤ平和作戦では、イスラエル軍がレバノン内にロシアの武器を大量に発見し、最大の危機を回避したとされています。

4節をご覧ください、「わたしはあなたを引き回し、あなたのおごに鉤をかけ」とあります。ロシアがイスラエルを取り巻く環境の背後で、動き回る姿にそっくりです。私たちが知らなければいけないことは、この主語です。「わたしは」つまり主ご自身が、これらの動きをすべて支配されていることです。プーチンがエゼキエル書のゴグだとは断定しませんが、けれどもそれに似た極めて怪しい動きをしています。けれども、それらはみな主ご自身の支配の中にあり、ご自分の怒りを下されるため、主があえてそうされていることを覚えてください。

そしてロシュ、マゴグの王と手を組むのは「ペルシヤ」すなわちイランです。ところで興味深いことに、このエゼキエル書38,39章は多くの注解書によると、文字通り受け止めるべきではなく、象徴的解釈をすべきだ、とのこと。なぜなら、全てがイスラエルから遠く離れた国々であり、彼らが連携するとは考えられない、という説明です。その通りです、人間的には想定外のことであり、歴史的にロシアとペルシヤが手を組んだことはありません。

けれども、最近その環境ががらりと変わりました。ロシアのプーチンとイランの前大統領アフマデネジャドが軍事的協定を結んだからです。プーチンも危ないですが、イランはイスラム原理主義の国です。宗教指導者が支配している国です。ちょうどオウム真理教の麻原彰晃が、国の指導者になったとお考えください。同じような過激で危険な終末思想、いや、思想ではなく「信仰」を強固に抱いています。イランは 30 年以上前に急激に変わり、それが世界を変えました。そうです「イスラム革命」です。それまではアラブのテロリストと言っても、PLO など革命社会主義的なものであり、宗教色はありませんでした。けれども、アラブ諸国がイスラエルとの戦争で連敗することによって、彼らはイスラム教への回帰に傾きました。それでシーア派の原理主義者らによる革命によって、イランはイスラム法に基づく国家を設立しました。

ホメイニの目標はあくまでも、イスラム法に基づく国家を造り上げることでした。けれどもイランは何も変わっていない。これは自らが造り上げるのではなく、イマームの到来を待つべきだからである。イマームとはイスラム教シーア派の預言者であり、第十二番目は今隠されている、とのことです。彼が現れる前に世界には大混乱が起こり、そしてイスラムに敵対する勢力を排して、アッラーの国をこの地上に打ち立てる、という考えです。つまりイスラム・シーア派版のメシヤの再臨です。そして今、「このイマームを消極的に待っているだけではだめだ。我々の力で、世界に混乱を引き起こせば、その到来を早めることができる。」と考えています。その手段が今、ニュースを騒がせている核開発です。

そして先ほど言ったように、クシュはエチオピアで当時はスーダンも含みました。スーダンはイスラム原理主義の国です。こうしてみると、アラブ人でつながっているのではなく「イスラム」でつながっている国々と見ることができます。

そして「ゴメル」と「ベテ・トガルマ」ですが、今のトルコに位置すると言われます。ゴメルもまた、ヤペテの息子の一人です。ドイツ方面であるという意見もありますが、トルコの北部という人々もいます。トルコが非常に重要な国になることは間違いありません。トルコも急速にイスラム化されています。トルコの重要性はそこがアジアとヨーロッパ、東洋と西洋を結ぶ分岐点だということです。その地域がどのように転がるかによって、その地域全体の勢力バランスが変わります。かつてオスマン・トルコ帝国がその地域一帯を支配しました。興味深いことに当時の地図を見ると、まさにこの章に出てくる国々を合わせたものとそっくりです。そしてトルコはオスマン帝国の野心を見せながら、動いています。そしてトルコは、イランにも接近しています。

したがって、この東洋と西洋の狭間にある国は、西側から東側に移る可能性は大です。特に西洋においてダニエル書で預言されている復興ローマ、反キリストの台頭の動きがますます強くなりますから、トルコが西を離れ、ロシア・イランの連合に加わり、イスラエル攻撃に加担することは十分に考えられます。

2A 安心しているイスラエル 7-16

1B 終わりの日 7-9

38:7 備えをせよ。あなたも、あなたのところを集められた全集団も備えをせよ。あなたは彼らを監督せよ。38:8 多くの日が過ぎて、あなたは命令を受け、終わりの年に、一つの国に侵入する。その国は剣の災害から立ち直り、その民は多くの国々の民の中から集められ、久しく廃墟であったイスラエルの山々に住んでいる。その民は国々の民の中から連れ出され、彼らはみな安心して住んでいる 38:9 あなたは、あらしのように攻め上り、あなたと、あなたの全部隊、それに、あなたにつく多くの国々の民は、地をおおう雲ようになる。

イスラエルが安心して住んでいるときに、この突如の攻撃が始まると主は教えておられます。イスラエルが安全になる？と聞けば、みなさん非現実的だと感じられるかもしれません。ここで、そのような考えを変える必要があります。今の時代は、イスラエル・アラブ間の紛争から、さらに周辺にあるロシア、イラン、その他イスラム諸国のもっと遠いところにある脅威に移っているということです。これは、1948年の独立戦争が最もユダヤ人にとって被害が大きかったですが、それから徐々に安全を確保してきたことを知らなければなりません。

アラブの国との国家間での戦いは、1973年のヨム・キプール戦争で実は終わりました。エジプトのサダト大統領が上手に戦争を終結させ、それを外交交渉の場に持ち込み、シナイ半島を奪還し、そしてイスラエルとの和平にまで持ち込んだからです。それが他のアラブ諸国にも波及しました。もう戦争ではイスラエルには決して勝てない、ということは嫌になるほど知っているのだから、国として戦うことはありません。その後の戦いは、PLOなどのゲリラ組織との戦いです。そしてこれらゲリラ組織も革命社会主義的なものから、イスラム主義に傾きました。レバノンにいるヒズボラはシーア派の原理主義者です。ガザ地区にいるハマスは、スンニ派の原理主義者です。イランはどちらも、特にシリアを通してヒズボラを支えています。

2000年に起こった第二次インティファダで自爆テロが多発しました。マスコミはいつも、イスラエルとパレスチナの紛争で、イスラエルは非常に危険な地域だと報じています。けれども実際にイスラエルに行ったことのある人は、それはごく一部の地域で起こっていることであり、ほんのちょっと気をつければ、本当に平穏なところであることを知ることができます。アラファトの死、そして分離フェンスのおかげで、自爆テロが激減しました。観光客も急増しています。そして2006年にレバノンにいるヒズボラとの戦いがあり、そしてちょうど去年、ハマスの間のガザ戦争がありましたが、イスラエル空軍はハマスの拠点にかなり打撃を加えることができました。

だから、イスラエルに対する私たち一般の人たちの印象とは正反対に、当のイスラエル人たちは、建国以来最も安全を確保したと言って安心しているのです。確かに私たちが見れば、特に日本から行く人にとっては、レストランに行っても空港にいるかのようにセキュリティーチェックを受けるのですから、危険な国と感じるかもしれません。けれども、シオニズム運動が起こってから間もなくし

てアラブ人の暴動に遭い、一連の中東戦争を経たイスラエル人にとって、以前と比べれば最も安全であると考えても全然おかしくありません。

2B 分捕り 10-13

38:10 神である主はこう仰せられる。その日には、あなたの心にさまざまな思いが浮かぶ。あなたは悪巧みを設け、38:11 こう言おう。『私は城壁のない町々の国に攻め上り、安心して住んでいる平和な国に侵入しよう。彼らはみな、城壁もかんぬきも門もない所に住んでいる。』38:12 あなたは物を分捕り、獲物をかすめ奪い、今は人の住むようになった廃墟や、国々から集められ、その国の中心に住み、家畜と財産を持っている民に向かって、あなたの腕力をふるおうとする。38:13 シェバやデダンやタルシシュの商人たち、およびそのすべての若い獅子たちは、あなたに聞こう。『あなたは物を分捕るために来たのか。獲物をかすめ奪うために集団を集め、銀や金を運び去り、家畜や財産を取り、大いに略奪をしようとするのか。』と。

これが、マゴグの君ゴグと、それに連なる国々が、イスラエルを攻め上る動機です。豊かになったイスラエルを貪って、分捕りたいということなのです。イスラエルがいかに先進的で豊かな国であるかを、私たちは知らなければいけません。36章の学びの時に、世界有数の農業国であることを話しましたが、それ以上に死海から取れるミネラルを売り、そしてテルアビブを中心に先端技術が世界有数です。そして、イスラエル指導層さえ想像していなかったことが起こりました。イスラエルの中で石油が発掘されたことです。それから、このような世界的不況の中で、イスラエルは景気が上向きです。今のネタニヤフ首相が財務大臣であったころ減税措置を断行し、経済を活性化させました。そして、今、一人当たりの所得が百万ドルの人たち、いわゆる億万長者が最も集まっているのがイスラエルなのです。アメリカではないそうです。したがって、イスラエルの豊かさを分捕りたいと思ってこれらの国々が攻め上ってきます。

そしてここに、少し反対表明を出すけれども、この軍事攻撃には何の意味もなさない国々の声が紹介されています。まず「**シェバやデダン**」です。これは今のアラビア半島、サウジアラビアになります。ここで今、中東のパワーバランスが大きく転換しているのを見ます。アメリカがイランに近づいたことです。かつては絶対にあり得なかったことが起こっています。イスラム国は、周辺のアラブ諸国の中で殺戮を繰り返しています。そして、イランはシーア派であり、その帝国主義的な活動をテロ活動の支援で行っています。それでこれまで以上に、アラブ諸国はイスラエルと利害を一緒にしているのです。イスラエル、ヨルダン、エジプト、サウジアラビア、そしてアラブ首長国は足並みを揃えています。イランの核合意に強硬に反対しているのはイスラエルだけでなく、イランの台頭を恐れるサウジアラビアもそうなのです。

そして次に「タルシシュの商人」とあります。ツロに対する預言の中で、その貿易で活躍しているのがタルシシュの船です。今のスペインにあるとされます。そして興味深いのが「そのすべての若い獅子たち」という言葉です。ここの「若い獅子」は「植民地」と訳すこともできます。アメリカ大陸を

発見したのが、そうこのタルシシュ出身のコロンブスです。アメリカ合衆国がこれだけ世界の超大国なのに、なぜ聖書預言の中に出てこないのか、特にイスラエルを支援する数少ない国なのに、なぜ？と思われるかもしれません。けれども、アメリカはやはり出てこない、あえて言うならば、ここにちょこっと出てきているかもしれない、です。アメリカは弱くなります。そのユダヤ・キリスト教の伝統と価値観によってこの国は強かったのですが、それを捨ててしまった今、その地域に対してほとんど力を持たなくなるというのが考えられるシナリオです。

3B 地を覆う雲 14-16

38:14 それゆえ、人の子よ、預言してゴグに言え。神である主はこう仰せられる。わたしの民イスラエルが安心して住んでいるとき、実に、その日、あなたは奮い立つのだ。38:15 あなたは、北の果てのあなたの国から、多くの国々の民を率いて来る。彼らはみな馬に乗る者で、大集団、大軍勢だ。38:16 あなたは、わたしの民イスラエルを攻めに上り、終わりの日に、あなたは地をおおう雲のようになる。ゴグよ。わたしはあなたに、わたしの地を攻めさせる。それは、わたしがあなたを使って諸国の民の目の前にわたしの聖なることを示し、彼らがわたしを知るためだ。

主はこれらのことを行なわれるご自分の目的を、強調されています。「わたしの聖なることを示し、彼らがわたしを知るためだ。」です。このようにして終わりの日には、否が応にも主が聖なる方である、主イエス・キリストご自身の父なる神こそが神であることを示されるのです。

3A 神の怒り 17-23

38:17 神である主はこう仰せられる。あなたは、わたしが昔、わたしのしもべ、イスラエルの預言者たちを通して語った当の者ではないか。この預言者たちは、わたしがあなたに彼らを攻めさせると、長年にわたり預言していたのだ。

聖書の預言の中には、ゴグに対する預言はここだけです。けれども、ゴグが行なおうとしている原型は至るところで見ることができます。エジプトにおいても、パロがゴグのような人間でした。イスラエルがようやくエジプトから出たのに、追っていき、彼らを奴隷として使うために襲おうとしました。数々の預言者が、イスラエルが多くの国々に取り囲まれて、攻められようとしているところを主が救い出してくださることを約束したことを見ることができます。

38:18 ゴグがイスラエルの地を攻めるその日、..神である主の御告げ。..わたしは怒りを燃え上がらせる。38:19 わたしは、ねたみと激しい怒りの火を吹きつけて言う。その日には必ずイスラエルの地に大きな地震が起こる。38:20 海の魚も、空の鳥も、野の獣も、地面をほうすべてのものも、地上のすべての人間も、わたしの前で震え上がり、山々はくつがえり、がけは落ち、すべての城壁は地に倒れる。

主がご自分の怒りをゴグに対して現されます。まずは地震を通してです。

38:21 わたしは剣を呼び寄せて、わたしのすべての山々でゴグを攻めさせる。・・神である主の御告げ。・・彼らは剣で同士打ちをするようになる。

地震だけではなく、同士打ちによっても彼らを滅ぼされます。イスラエル人が戦ったなかで、主がこのことを数多くなされました。例えば、ギデオンが 300 人の仲間とともにミデヤン人と戦った時、同士打ちがありました。今日でも、アラブが行なう戦争を見れば、必ずと言ってよいほど団結できず、しばしば互いに殺し合います。ゴグの連合軍に対しても同じことを主は行なわれます。

38:22 わたしは疫病と流血で彼に罰を下し、彼と、彼の部隊と、彼の率いる多くの国々の民の上に、豪雨や雹や火や硫黄を降り注がせる。

エジプトに対する災いやソドムとゴモラを思い出しますね。疫病と流血。そして雹や火です。

38:23 わたしがわたしの大いなることを示し、わたしの聖なることを示して、多くの国々の見ている前で、わたしを知らせるとき、彼らは、わたしが主であることを知ろう。」

神はこのことを、全世界にご自分を知らしめる出来事として行なわれます。

4A 死体処理 39章

そして 39 章に入りますと、この襲ってきた軍隊が一気に死体として積み上がります。それをいかにしてイスラエルが処理していくか、そのことについて話しています。

39:1 「人の子よ。ゴグに向かって預言して言え。神である主はこう仰せられる。メシエクとトバルの大首長であるゴグよ。わたしはあなたに立ち向かう。39:2 わたしはあなたを引き回し、あなたを押しやり、北の果てから上らせ、イスラエルの山々に連れて来る。39:3 あなたの左手から弓をたたき落とし、右手から矢を落とす。39:4 あなたと、あなたのすべての部隊、あなたの率いる国々の民は、イスラエルの山々に倒れ、わたしはあなたをあらゆる種類の猛禽や野獣のえじきとする。39:5 あなたは野に倒れる。わたしがこれを語るからだ。・・神である主の御告げ。・・39:6 わたしはマゴグと、島々に安住している者たちとに火を放つ。彼らは、わたしが主であることを知ろう。39:7 わたしは、わたしの聖なる名をわたしの民イスラエルの中に知らせ、二度とわたしの聖なる名を汚させない。諸国の民は、わたしが主であり、イスラエルの聖なる者であることを知ろう。

次に主が火を放たれた後のことを語られます。

39:8 今、それは来、それは成就する。・・神である主の御告げ。・・それは、わたしが語った日である。39:9 イスラエルの町々の住民は出て来て、武器、すなわち、盾と大盾、弓と矢、手槍と槍を燃やして焼き、七年間、それらで火を燃やす。39:10 彼らは野から木を取り、森からたきぎを集める

必要はない。彼らは武器で火を燃やすからだ。彼らは略奪された物を略奪し返し、かすめ奪われた物をかすめ奪う。…神である主の御告げ。…39:11 その日、わたしは、イスラエルのうちに、ゴグのために墓場を設ける。それは海の東の旅人の谷である。そこは人が通れなくなる。そこにゴグと、そのすべての群集が埋められ、そこはハモン・ゴグの谷と呼ばれる。39:12 イスラエルの家は、その国をきよめるために、七か月かかって彼らを埋める。39:13 その国のすべての民が埋め、わたしの栄光が現わされるとき、彼らは有名になる。…神である主の御告げ。…39:14 彼らは、常時、国を巡り歩く者たちを選び出す。彼らは地の面に取り残されているもの、旅人たちを埋めて国をきよめる。彼らは七か月の終わりまで捜す。39:15 巡り歩く者たちは国中を巡り歩き、人間の骨を見ると、そのそばに標識を立て、埋める者たちがそれをハモン・ゴグの谷に埋めるようにする。39:16 その町の名はハモナとも言われる。彼らは国をきよめる。

七か月をかけての死体処理です。これはまさに、死んだ姿を見せて敵がいなくなった、あなたも怖がる必要はないということを示すためです。イスラエルの民が紅海を渡り、死んだエジプト人を見たのと同じです。「出エジプト 14:30-31 こうして、主はその日イスラエルをエジプトの手から救われた。イスラエルは海辺に死んでいるエジプト人を見た。イスラエルは主がエジプトに行なわれたこの大いなる御力を見たので、民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じた。」

39:17 神である主はこう仰せられる。人の子よ。あらゆる種類の鳥と、あらゆる野の獣に言え。集まって来い。わたしがおまえたちのために切り殺した者、イスラエルの山々の上にある多くの切り殺された者に、四方から集まって来い。おまえたちはその肉を食べ、その血を飲め。39:18 勇士たちの肉を食べ、国の君主たちの血を飲め。雄羊、子羊、雄やぎ、雄牛、すべてバシヤンの肥えたものをそうせよ。39:19 わたしがおまえたちのために切り殺したものの脂肪を飽きるほど食べ、その血を酔うほど飲むがよい。39:20 おまえたちはわたしの食卓で、馬や、騎手や、勇士や、すべての戦士に食べ飽きる。…神である主の御告げ。…

ハルマゲドンの戦いの後で見られるような、猛禽類による死体を食べる姿を見ます。当時の社会において、死体が丁寧に葬られないことは、ただ死ぬことよりももっと辛いことでした。ですから、主による徹底的な裁きです。

39:21 わたしが諸国の民の間にわたしの栄光を現わすとき、諸国の民はみな、わたしが行なうわたしのさばきと、わたしが彼らに置くわたしの手とを見る。39:22 その日の後、イスラエルの家は、わたしが彼らの神、主であることを知ろう。39:23 諸国の民は、イスラエルの家が、わたしに不信の罪を犯したために咎を得て捕え移されたこと、それから、わたしが彼らにわたしの顔を隠し、彼らを敵の手に渡したので、彼らがみな剣に倒れたことを知ろう。39:24 わたしは、彼らの汚れとそむきの罪に応じて彼らを罰し、わたしの顔を彼らに隠した。39:25 それゆえ、神である主はこう仰せられる。今わたしはヤコブの捕われ人を帰らせ、イスラエルの全家をあわれむ。これは、わたしの聖なる名のための熱心による。39:26 彼らは、自分たちの地に安心して住み、彼らを脅かす者

がいなくなるとき、わたしに逆らった自分たちの恥とすべての不信の罪との責めを負おう。39:27 わたしが彼らを国々の民の間から帰らせ、彼らの敵の地から集め、多くの国々が見ている前で、彼らのうちにわたしの聖なることを示すとき、39:28 彼らは、わたしが彼らの神、主であることを知ろう。わたしは彼らを国々に引いて行ったが、また彼らを彼らの地に集め、そこにひとりも残しておかないようにするからだ。39:29 わたしは二度とわたしの顔を彼らから隠さず、わたしの霊をイスラエルの家の上に注ぐ。・・神である主の御告げ。・・」

こうやって、彼らは主に立ち返ります。御霊が注がれて立ち返ります。イスラエルが安心して住んでいるとき、と強調しておられます。なぜか？彼らが安心して住んでいるので、主を見上げることをしていないからです。ちょうどこれは、イスラエルの民がエジプトをようやく出ることができたけれども、少し引き返し、紅海のほとりにあるところで宿営させ、あえてパロの心を再びかたくなにさせ、イスラエル人を奪いとるようにさせたのと似ています。単にエジプトを出て行くだけではわからない神の栄光を、危機一髪の状態をあえてこしらえて、そこからイスラエルを救われることによって、ご自分が主であることを示されるのです。

イスラエルの人々に、私たちが驚く、彼らの身に起こった数々の奇跡をもってしても、そのほとんどが、「私たちの努力と智恵によって」と答えます。自分たちの力に誇りを抱いています。だから、イスラエルが決して自分たちの力ではどうしようもできないように、神があえてされるのです。私たちも同じでしょう。私たちの周りに起こる騒ぎ、これまで頼っていたものがなくなった、などは主が行なわれていることなのです。私たちが力を尽くして主を求め、主に拠り頼むようにするためです。主が予め恵みで臨んでくださっています。いつになったら、私たちも気づくのでしょうか。その気づく時を主が少しずつ与えてくださっています。